

宗教・文化研究所公開講座講演録要旨

水無瀬離宮（水無瀬殿）の空間構成と機能について

豊田 裕章

はじめに

後鳥羽上皇の治世は、日本史の大きな転換点となった時期である。この後鳥羽上皇がとりわけ愛好した離宮が水無瀬離宮（水無瀬殿）であった。従来の研究では、この離宮に関しては単体の別業として認識され、この離宮の全体構造の復元やこれを都市的なものとして認識することは行われていなかった。

筆者は、平成二十年（二〇〇八）年よりこの離宮の研究に取り組み、その構造の復元を試みた。そして、この離宮が、政治や経済の拠点としての機能を有する、当時の日本にあって都市的な存在であったことを指摘した。

本稿は、後鳥羽上皇の水無瀬殿の空間構成と機能について、平成二十九年（二〇一七）に京都女子大学で行った講演の内容を簡潔にまとめたものである。ただし紙幅の関係で割愛した部分も多い。詳細については、講演のレジ

メとともに当日配布していただいた旧稿（豊田裕章二〇一六）を参照していただければありがたい。

一、水無瀬離宮（水無瀬殿）の空間構成

（一）立地

水無瀬離宮（水無瀬殿）の所在する水無瀬の地は、摂津国嶋上郡にあり、現在の大阪府三島郡島本町に相当する。この地は河陽とも呼ばれ、古来風光明媚な地として称揚された。

水無瀬離宮は、久我畷のような陸路や、淀川などの舟運により京と通じている。淀川を渡河して交野路を用いることにより、京や宇治を経ることなく、河内から大和、さらには東国方面へ赴くこともできる。また伏見・小栗栖・勧修寺・山科などを経て、近江、北陸方面へと繋がる。西山地域を経ることによって、丹波・丹後方面へ行くことも可能である。播磨大路、津門の中道などの陸路や、淀川などの舟運によって、西国方面に、さらに難波を経て紀伊などの南海道の諸国にも通じる。

水無瀬は、このように四通八達の地である。また、天王山と男山に挟まれた狭隘部にあり、京と西国との人や物資の出入りを抑えることができる場所でもあった。それは、流通や経済上の要地であるだけでなく、軍事的な要衝でもあったことを示している。

（二）変遷

筆者は、大規模な改修などを指標として、この水無瀬離宮の変遷課程を、第一期（正治二年～元久二年）、第二

期（元久二年～建保四年）、第三期（建保五年～承久三年）に区分した。

第一期は、源通親の「水成瀬山庄」を後鳥羽上皇が離宮とした時期である。白拍子合などの遊興が盛んに行われた。また、『水無瀬恋十五首歌合』などの日本の文学史上重要な歌合が開かれた。

第二期には、本御所の寝殿の大改修や藤原重子（修明門院）のための小御所の建設、上皇の御願寺である蓮華寿院の造営などがなされた。また、笠懸などの弓馬の催しが盛んに開催された。順徳天皇も建保元年（一二二三）六月に水無瀬に行幸している。また、後鳥羽上皇皇子の雅成親王が、水無瀬に「六条宮御所」を所有していたことが確認できるのもこの時期である。

第三期は、新御所や山上御所の造営が完成した時期である。この第三期の水無瀬殿は、本御所や新御所、南御所からなる中核区域だけでなく、その外部の山側に山上御所も造営され、最も拡充された構造となった。『明月記』には、伝聞ではあるけれども、この時期に公私の土木事業が盛んに行われ、人々に土地の分給があり、上下に関わらず商売の営みがなされ、平安京の重要な市場である魚市が移されたことを記している。

なお、水無瀬殿という言葉は、構成する複数の御所群や関連施設の総称であり、これらは正式には、「水無瀬殿○○御所」のように呼ばれる。また、御所という言葉は御在所のことであり、上皇や天皇、皇族などの邸宅だけでなく、その中にある広御所のような殿舎の呼称、御座所そのものを表す場合もある。

（三） 水無瀬離宮（水無瀬殿）の諸施設

① 本御所

本御所は、内大臣源通親の水成瀬山庄を離宮にして以来の御所である。現在の水無瀬神宮が、その故地を継承す

るものであるとされる。本御所という名称は、旧御所の意味ではなく、本所御所、根本御所の意味である。元久二年（一二〇五）の大改修後の寝殿は、少なくとも母屋、庇、南広庇（孫庇）から成る構造であった。

母屋、庇、孫庇から構成された寝殿の南には約二十四〜二十七メートル四方の広場（南庭）があり、ここに仮設の懸木である切立を立てて、蹴鞠も行われている。この本御所は、東側が水路に接していたことから、西側がアプローチ空間であり、ここに中門や中門廊、御車宿があったと考えられる。この御所には東釣殿があったけれども、西側の中門廊の南端には釣殿などの建物はなかったようである。また、本御所には付属建物として弘御所（広御所）があった。ここでは、遊女を着座させて常儀のように郢曲や神歌、今様合、上北面による乱舞などの遊興が行われた。

なお、この本御所は二重構造で、内区には内門（中門ではない）が、外区には総門（棧門か）が開いていたと考えられる。

②小御所

第二期の建暦三年（一二一三）二月に、藤原重子（修明門院）のために建てられた建物である。藤原忠綱が造営を担当した。水無瀬離宮の小御所には、間口三間、梁行二間の母屋の四面に庇をめぐらせ贅を尽くした寝殿があった。また、台盤所、女官台所、進物所や湯殿も設けられた（『仙洞御移徙部類記』所収の藤原頼資の『勘中記』）。御幸始が小御所から本御所のことかと考えられる「南殿」に向けて行われていることから、本御所の内部を別区画のように仕切ったか、或いはその外部に別個の邸第として建設された可能性が考えられる。

③馬場

水無瀬殿では、第一期から第二期にかけて、競馬や笠懸などの弓馬の催しが盛んに行われていた。島本町立島本第一小学校の西側には、現在も南北幅約十メートル、東西長約百メートルと異常に細長い形状の農地がある。このラインを西に延長すると、昭和三十年代頃まで、標高約六十メートル、比高約四十メートルの小山であった百山という高台に達する。東に延長すると、本御所の跡地である水無瀬神宮の西門に至る。

『明月記』承元元年（一二〇七）正月三十日条に、前太政大臣大炊御門頼実や尊長僧都等が念人となり笠懸を観覧したと記される「小山」は、現在の百山であると推定する。建保五年（一二一七）に小山の麓に新御所が建設される以前は、馬場がこの麓まで伸びていたと考えられる。新御所建設以後、この馬場は、新御所と本御所をつなぐ東西方向のメインストリートとしての機能を高めたことであろう。

④馬場殿

水無瀬殿の本御所には第一期、第二期、第三期と馬場殿と呼ばれる建物が存在した。第二期の馬場殿では、笠懸の観覧などとともに蹴鞠や小弓も行われていた。第一期の建物を継承していると考えられる第二期の馬場殿は、先述したように本御所の外部でその西側にあった。

なお、馬場殿は修法の場としても用いられた。仁和寺には、第三期の建保五年（一二一七）三月に仏眼法の修法が行われた際の、水無瀬殿の馬場殿の図面が残されている。この図によると、馬場殿は北向きに造られている。このことから、馬場殿は馬場の南側に建てられていたと考えられる。馬場殿は第一、二、三期と同一の場所に建てられていたか現時点ではわからない。ただし、この指図は建保五年のものであることから、記された年代である第三

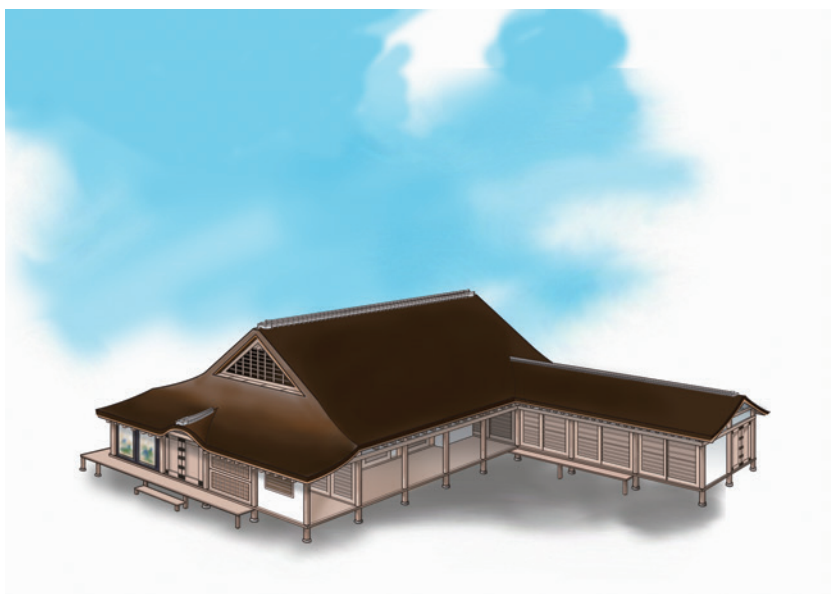


図1 建保5年（1217年）の水無瀬殿の馬場殿の推定復元図

仁和寺所蔵の「仏眼法道場図 建保5年3月 於水無瀬殿」をもとに、『春日権現験記』などの絵画資料を参照して推定復元した。建物内部の東側に上皇の御座所があると考え、上皇の出入り口と考えられる東側の扉の上の屋根に唐破風を付加した（豊田裕章の原画にもとづき、因千枝子作画）。

期の新御所にとまなう馬場殿の図であろう。
図一は、この仁和寺所蔵の指図をもとに推定復元したものである。

⑤長廊

第二期の『明月記』建永元年（一二〇六）九月二十日条には、水無瀬殿の建物として「公卿殿上人宿所長廊」が見える。同じく第二期の建暦三年（一二〇六）十二月二日条には、後鳥羽上皇が長廊西妻を宿所とするので、雑舎を増築してここに渡御したと記す。筆者は、水無瀬殿にあった長廊を、『後鳥羽院宸記』の建保二年（一二〇七）四月二十五日条の賀茂社参籠に関する記事などから、本御所内部の殿上廊や中門廊ではなく、邸外の独立した長廊状建物であると考えた。

なお、水無瀬殿には、このような長廊状の建物が複数存在した可能性もある。『増鏡』

の水無瀬殿に関する叙述にみえる「萱葺の廊」とは、このような長廊状の建物のことであろう。

鎌倉幕府の大倉御所の侍所は、桁行十八間と推定されているけれども、この建物は、おそらく水無瀬離宮の長廊に見られるような長廊状の独立した建物ではないか。

⑥上皇の御願寺の蓮華寿院（水無瀬御堂）

蓮華寿院は、後鳥羽上皇の御願寺で水無瀬御堂とも呼ばれた。元久二年（一二〇五）に、前太政大臣大炊御門頼実によって造営された。その本尊は等身の阿弥陀如来像であり、後鳥羽上皇自ら開眼を行った千体の地藏菩薩像も並べ安置されていた。この寺院の造営は、元久元年十月（一二〇四）に逝去した、後鳥羽上皇の寵妃尾張局の追善のためになされたものである。『古今著聞集』の説話から、蓮華寿院は、山近くにあり池に面していたと考えられるので、その跡地として島本町桜井付近を推定する。

⑦新御所（上御所）と南御所（蘭殿）

水無瀬殿本御所が建保四年（一二一六）の大洪水で顛倒流出したため、他所を選び定めて水無瀬殿新御所が造営された。『仁和寺日次記』では、この御所を上御所と記す。建保五年（一二一七）正月十日に、新御所の完成を祝して移徙が行われた。翌日の正月十一日には新御所と考えられる寝殿の南の孫庇（広庇）で、公卿によって御遊始が行われている。天台宗の重書である『阿婆縛抄』の水無瀬殿での地鎮に関する記載や指図をもとに、新御所の寝殿の構造を、母屋が桁行三間、梁行二間で、四面に庇がめぐり、南・西・東面にさらに広庇（孫庇）が設けられていた構造であると推定した。

この『阿婆縛抄』の記載や指図から、水無瀬殿新御所は平地に立地し、その周囲が「築垣」で囲まれていたことが考えられる。また、その南側には、藺殿と呼ばれる建物がある、区画を異にする南御所が存在したことがわかる。この史料に記された門の位置や御車宿の位置から、新御所は東側をアプローチとする構造であったと考えられる。大正時代ぐらまでは、新御所に関連するような、小地名や築垣の痕跡らしいものなどが伝えられていた。しかし、現在ではそれらはどこであるかは不明となっていた。そこで、明治時代や江戸時代の古図類を検討して、小地名や築垣の痕跡を見出し、新御所と南御所は、現在の住所表示で島本町百山一に新御所と南御所が南北に並ぶ形で存在したと考えた。

⑧ 水無瀬殿山上御所

藤原定家は、『明月記』に、第三期の建保五年（一二一七）二月、重相（大納言）によって山上に新御所が造営されたと伝聞で記す。この御所は、苑池や滝を配し眺望を重視した構造であったようである。

従来の研究では、『明月記』の記載に関して、同年正月に移徙が行われた水無瀬殿新御所と同一のものとされていた。しかし、先述したように、水無瀬殿新御所は、百山の麓に立地して、四周を築垣で囲まれたものである。それは、山上にあったとする『明月記』の記載と合わない。

藤原定家の私歌集である『拾遺愚草』には、『明月記』に伝聞で記したこの御所を、定家が実際に訪れた時の感慨が記される。そこには、「水無瀬殿の山のうへの御所」という名称で記しており、この御所の正式の名称が、「水無瀬殿山上御所」であったことがわかる。このことから、『明月記』に見える山の上に造られた御所は、新たに造られたという点では、平地に造営された水無瀬殿新御所（上御所）と同様に新御所ではあるけれども、それとは別

の水無瀬殿山上御所と呼ばれるものであると考えられる。そして、その場所については、鶴ヶ池から西方の山側に広がるものであると推定した。

このように推定し指摘していた場所から、平成十四年（二〇一四）に島本町教育委員会によって発掘調査が行われ庭園遺構が検出された。

なお、この山上御所を上皇のために造営したのは、源通親の後継者である源通光であると推定する。

⑨ 親王の御所

『門葉記』の修法に関する記載から、後鳥羽上皇皇子の六条宮雅成親王の御所が、水無瀬にあったことがわかる。桜井のJR島本駅の西側の山麓には「六条殿」という小字が伝えられている。この小字には、景石状の石が水没していることから、中島の存在が推定される御所池という池がある。さらにその南には岬状の州浜を有する苑池の遺構らしい農地がある。これらは後世の改修で高低差ができていなければならないけれども、本来は一つの池であったのではないか。六条宮御所は、この池に面して建てられていたと考えられる。

⑩ 近臣の宿所

建仁二年（一二〇二）六月七日の洪水の際、後鳥羽上皇は源通親の宿所である「内府上直廬」に避難している。源通親は自らの別業を上皇の御所として提供してからも、水無瀬殿の付近で洪水の影響を受けにくい場所に、宿所としての別邸を構えていたことがうかがえる。源通親の宿所は、『明月記』に「内府泉」と記され、池泉のあるようなものであった。

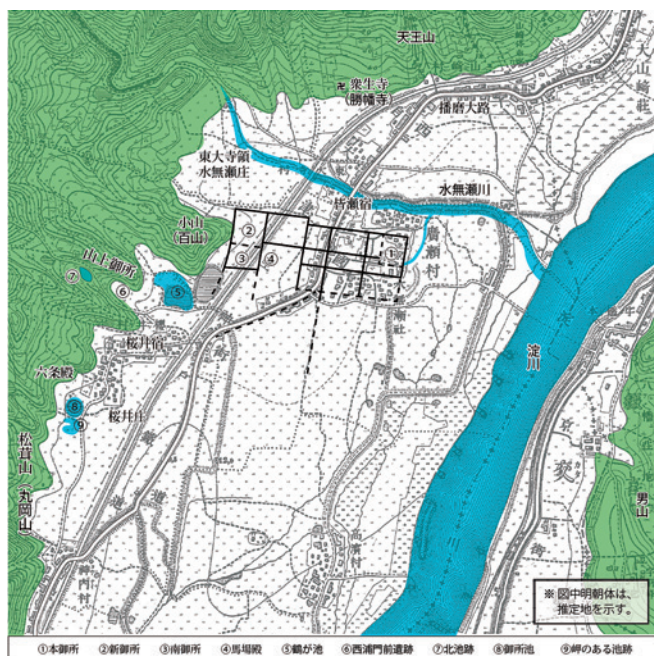


図2 鎌倉時代の水無瀬推定復元図
(国土地理院所蔵、明治23年測量地形図に加筆、出典豊田裕章2016)

水無瀬には、他にも、藤原兼子、大炊御門頼実、尊長僧都などの上皇の有力近臣が宿所を所有していた。これらの中で、通親の宿所には池泉があったことも確認される。ただし、摂関家の九条道家や近衛家実も自前の宿所を所有していなかった。

(四) 水無瀬離宮（水無瀬殿）を中心とした 水無瀬（河陽）地域の空間構成

本御所と新御所・南御所を結ぶ、馬場と推定する東西ラインの辺りは、馬場殿、長廊などの関連施設も設けられた水無瀬殿の中核区域であったと考えられる。この中核区域には、条里的地割を部分的に用いたと考えられる街区の痕跡が見られる。この街区は、本御所に近い側のものと、新御所に近い側のものと異なっている。そこで、前者を街区A、後者を街区Bと名付けた。街区Aは本御所を中心に

第一期、第二期に整備されたもので、街区Bは新御所を中心に第三期に整備が進められたものであるため、このような違いを生じたと考える。

水無瀬殿は、この中核区域だけでなく、さらに西南の山側に、庭園施設を擁する山上御所、上皇の御願寺である蓮華寺院、雅成親王の御所を配して、広大な広がりをも有するものであったと考えられる。水無瀬の地域には、『後鳥羽天皇御手印御置文』に見える「水無瀬」、「井内」という水無瀬殿に直接的に付属する土地だけでなく、後院領である桜井庄があった。水無瀬殿はこのような地域を付随地として、そこに関連諸施設を広く展開していたと考えられる。図二は、この水無瀬殿を中心とする水無瀬地域を概括的に示したものである。

鎌倉時代後期のものではあるが『夫木和歌抄』には「水無瀬湊」が見え、水無瀬には川湊が存在したと考えられる。川湊の場所としては、平安時代初期の須恵器の大甕や鎌倉時代の常滑焼の大甕が出土した広瀬南遺跡などが該当するのではないか。伝聞記事ではあるが、『明月記』の建保五年の魚市移設の記載から、水無瀬殿を中心とする水無瀬地域の経済的な機能の整備がなされつつあったことがうかがえる。

二、水無瀬離宮（水無瀬殿）の機能

水無瀬殿には、今様や白拍子合、蹴鞠などに興じる遊興の場、水無瀬恋十五首歌合のような歌合や連歌会が行われるような文芸の場、笠懸や競馬、狩猟などの武芸の場、修法の場としての機能があった。また、水無瀬殿を中心とする水無瀬の地域は、魚市の移設の記事にうかがわれる経済的な拠点としての機能や、承久の兵乱で軍勢が配備されたことに見られる軍事的拠点としての機能も有していたと考えられる。

それとともに、従来指摘されていなかったことではあるけれども、水無瀬殿は実務的な政務運営の拠点としての機能を有していた。水無瀬殿では、京から伺候した弁官や蔵人頭による、後鳥羽上皇への上奏が行われ、上皇の水無瀬殿における裁定は、これらの人々を介して朝廷に伝えられ政策として実施された。また、後鳥羽上皇の裁定は、上皇の直筆の書簡である「御文」や「女房書状」という形で伝達されることもあった。後鳥羽上皇には、水無瀬に滞在中も、建保二年（一二一四）四月十五日の園城寺と延暦寺の合戦の際に見られるように、喫緊の政治的課題に対する報告が即座に伝えられていた。

筆者は、政治や文化、経済の重要な拠点となる場所であれば、たとえ人口の集中の度合いが低くても都市と表現するべきであると考ええる。このような点から言えば、水無瀬殿は、鳥羽、宇治、平泉、福原、鎌倉などと同様に重要な中世都市であるといえる。

水無瀬離宮（水無瀬殿）は、本御所、新御所、南御所などの少なくとも三か所以上の御所や関連施設から成る中核区域だけでなく、広大な付随地に、山上御所のような苑池や滝を配して眺望を重視した山上御所や、中島のある池に面した上皇の御願寺である蓮華寿院、池泉をともなった源通親の宿所である「内府泉」などの近臣の宿所を分散して配置し、それらを水無瀬殿というシステムに統合するようなものであったと考えられる。

風景というものは鑑賞者の立つ位置によって大きく異なる。このようなシステムを通じて、御所群内部の庭園にとどまらず、付随地も含めた一帯のすぐれた景観をつなぎ合わせ、水無瀬という地域をいわば広大な庭園として機能させていたのであろう。それは堀の中の庭を主体として周囲の景色を取り込むという静的な借景ではなく、建築学で言うシーケンスデザインのように、広がりのある地域の自然の景観そのものを、鑑賞者が広範囲に動くことによって庭園とするような動的な庭園思想であったと考えられる。

結語

水無瀬離宮（水無瀬殿）は、内大臣であった源通親の山荘を後鳥羽上皇の離宮とした第一期、寢殿の改修、小御所や上皇の御願寺である蓮華寿院の建設された第二期、新御所や山上御所が造営され魚市が移設されたという第三期と次第に拡充された。

その盛期である第三期の水無瀬殿は、本御所、新御所、南御所（菌殿）などの複数の御所や小御所、馬場殿、長廊などの付属施設からなる中核区域だけでなく、その西南の山側に、これも水無瀬殿を構成する御所の一つである山上御所が造営された。また、上皇の皇子である雅成親王の御所、上皇の御願寺である蓮華寿院（水無瀬御堂）も桜井付近の山側に造営されたと考えられる。またこの御所の周辺には、源通親、藤原兼子、大炊御門頼実、尊長僧都などの上皇の有力近臣の宿所も設けられた。

このような水無瀬離宮（水無瀬殿）は、遊興の場、文芸の場、武芸の場、修法の場としての機能を有し、軍事的拠点として用いられることもあった。それとともに重要な政策決定がなされる政務の拠点であり、経済的な拠点としても整備されつつあった。

政治や文化、経済の重要な拠点となる場所であれば、たとえ人口の集中の度合いが低くても都市と表現するべきであると考ええる。このような点から言えば、水無瀬離宮（水無瀬殿）は、鳥羽、宇治、平泉、福原、鎌倉などと同様に重要な中世都市であるといえる。

承久の兵乱で頓挫しなければ、水無瀬殿のある水無瀬の地域は、後鳥羽上皇の重要な都市としてさらに発展して

いた可能性が考えられる。

水無瀬は第二次世界大戦後の開発で風景が変貌した。しかし、現在においても、まだ後鳥羽上皇の時代の歴史的な痕跡や情景が残されている。それらが、歴史遺産として保存され後世に継承されていくことを望みます。

【参考文献】（紙幅の関係から拙稿の揭示にとどめた）

豊田裕章「復元水無瀬離宮 後鳥羽上皇の庭園都市」（白幡洋三朗、錦仁、原田信男編『都市歴史博覧 都市文化のなりたち・

しくみ・たのしみ』、笠間書院、二〇一一年）

豊田裕章「水無瀬殿の総合的研究」（奈良文化財研究所 文化遺産部編『平成二十三年度 庭園の歴史に関する研究会報告書

鎌倉時代の庭園 京と東国』、奈良文化財研究所 文化遺産部、二〇一二年）

豊田裕章「鎌倉時代における離宮および山荘と庭園」（白幡洋三朗編『作庭記』と日本の庭園』所収、思文閣、二〇一四年）

豊田裕章「水無瀬殿（水無瀬離宮）の都市史ならびに庭園史的意義」（奈良文化財研究所学報第九十六冊 研究論集十八『中世

庭園の研究―鎌倉・室町時代―』独立行政法人国立文化財機構 奈良文化財研究所、二〇一六年）

なお、二〇一九年度に刊行される京都大学人文科学研究所の共同研究「東西知識交流と自国化―汎アジア科学文化論」の論集である『天と地の科学』に、水無瀬離宮の構造に関して本講演以後に検討した問題なども加筆するとともに、その選地・設計思想について考察した、拙稿「後鳥羽上皇の水無瀬離宮（水無瀬殿）の構造とその選地思想について」が掲載予定である。

〈キーワード〉

後鳥羽上皇 離宮 中核区域の形成と外部への広がり 拡充 シーケンス 政治や経済の拠点 都市